

帝都地下迷宮

中山七里

第一回

汽笛一声万世橋を

1

ひよつとすると僕は死体愛好家なのかもしれない——銀座線旧新橋駅に向かう電車の中で、小日向巧こひなたたくみはふとそんな風に考えていた。

丸の内線の赤坂見附駅あかさかみつけから銀座線ぎんざせんに進入する。構内の照明で煌々こうこうとした丸ノ内線側のホームを車窓から眺めるのは新鮮だった。普段は使わない線路を走っていると、まるでこのまま別世界に連れていかれるような、不思議な昂揚感こうようかんに包まれる。

やがて電車は旧新橋駅に到着。小日向は昂奮を抑えきれずホームに降り立つ。

中央には〈新橋駅 幻のホーム〉、そして当時を模したもタイル張りの〈橋新〉という看板が掲げられている。ホームの長さは七十メー

トルほどで、現行のホームの半分ほどしかないのは当時の車両が今よりもずっと短い二両編成であった証左だ。

ホームの幅もひどく狭い。これは当時からではなく、会議室や駅員用の仮眠室を設けたからだ。従って全体としてこぢんまりとした印象がある。照明も乏しくひと気もなく、まさしく打ち棄てられた場所のようだ。壁に設置された車止めもやけに侘しく映る。

息を吸い込むと鉄と機械油、そして土くれの臭いがする。人の臭いが一切しないのは、やはり限られた関係者しか出入りしていないせいだろうか。

旧新橋駅が廃駅になった経緯はこうだ。開通当時、地下鉄運営は東京地下鉄道と東京高速鉄道の二社が覇権を争っていた。まず東京地下鉄道が一九三四年六月に浅草〜新橋間の終点として新橋駅を建設。少し遅れて東京高速鉄道が一九三九年一月に渋谷〜新橋の終点として同じく新橋駅を建設。覇権を争っていた事情で二つの新橋駅は乗り入れもできない状況だった。やがて東京高速鉄道の総帥五島慶太が東京地下鉄道の株を大量に買い占め、一九三九年九月に競合相手である東京地下鉄道側の線路を本線として使用することを決定した（これが現在の銀座線の由来だ）。

こうして東京高速鉄道側の新橋駅はたった八カ月で〈旧〉新橋駅という蔑称を与えられ、本来の役割を奪取されるに至る。言い換え

れば旧新橋駅は地下鉄創業当時の名残なごりであり、且つ覇権争いの象徴
ということもできる。実際ホームに立ってみると時代の波に翻弄ほんろうさ
れ、消し去られていった者の悲哀と寂寥せきりょうが胸に迫ってくる。

不意に死の臭いを嗅いだような気がした。

夏草や兵どもが夢の跡——。

小日向はこの無常観が好きだった。新しいもの強いものが次代を
築く陰で、こうした敗残を目の当たりにしていると、己おのれもいつかは
屍しかばねを晒すのだという冷たい現実を噛み締めることができる。

最近は無常観を訪ねたり撮影したりするのがちょっとしたブームに
なっている。訳知り顔の者たちは滅びの美学とか忘れ去られたもの
への郷愁とか知った風な解釈をしているが、ブームを牽引けんいんしている
当人たちの一人がインタビューで洩らしたひと言がこれだった。

廃墟とかって、要は死体と一緒になんですよ——。

小日向はその言葉がひどく腑ふに落ちた。考えてみれば使用されな
くなり無残な骸むくろを晒す建造物も、静物となった死体も本質的には似
たようなものだ。そしてもの言わなくなった残骸の哀しみに共感を
覚える。

しばらく感慨かんがいに耽ふけっていると、虚ろなホームに女性の声が響き渡
った。

「皆さあん。そろそろ見学の終了時間が近づいてきましたー。今の

うちに撮影を済ませてくださあい」

〈幻のホーム見学ツアー〉案内人である、東京メトロ女性職員の声だった。

ちゃんとしたカメラを持参していなかった小日向は慌ててスマートフォンを取り出し、壁に背を預けて構内の様子を撮り始める。中でも二つの線路を隔てるアーチ型の遮蔽壁（しゃへい）が気に入った。アーチから覗く向こう側のホーム、掛けられた『頭上注意』の看板に何とも言えない風情がある。

鉄道オタクとひと言で括つても、その種類は乗り鉄・撮り鉄・車両鉄など数十種類に及ぶ。小日向のような廃駅鉄も少なからず存在するが、廃駅鉄だからと言って撮影に興味がない訳ではない。殊（こと）に公式な廃駅見学ツアーなどそうそう開催されるものではないので、記念に撮っておくに越したことはない。小日向は制限時間まで撮影を続けようとした。

その時だった。

背中が奇妙な振動を感知した。

咄嗟（とつさ）に壁に耳を当てる。

がらがら

がらがら

まるでトロツコが線路上をゆっくりと移動しているような音だっ

た。

小日向は鉄道知識を総動員するが、旧新橋駅に隣接した線路など見たことも聞いたこともない。ではいったい何の音だ。

そのままの姿勢でいると、目ざとい女性職員に見つかった。

「どうかしましたか」

「この壁の向こう側から音がするんです」

すると女性職員は事もなげに答えた。

「ああ、それは耳の錯覚なんですよ。ほら、ホームのずっと向こう側は銀座線が走っているでしょう。あっちの走行音が構内を伝わってここまで響いてくるんですよ」

そんなものかと一応納得していると、ひと言付け加えられた。

「もう時間ないですよ。あと二分です」

見学を終え、小日向を含めた二十名の参加者たちは案内人の女性職員に引率いんそつされ、旧新橋駅を後にした。二十名のうちの何人かは同様のイベントで見知った同好の士だ。小日向は彼らと情報交換しながら帰路に着く。精神的にも肉体的にも楽とは言えない毎日だが、この趣味に浸る時間だけは至福を味わうことができた。

時計の針が午前八時三十分を過ぎた途端、区役所の三階フロアには市民が一斉に押し掛けてくる。生活支援課相談・保護係は特にそ

うだ。よほど生活に困窮しているのか、それとも順番待ちをするのが嫌なのか、とにかく我先にと窓口に殺到してくる。

小日向の仕事は、窓口で生活保護申請に訪れる市民を相手にすることだった。申請書への記入から受給までの流れ、申請を却下あるいは支給を停止される事由等を説明する。細かい規定が少なくないので話は長くなるが、一度の説明で理解できない相談者には更に長く感じられるだろう。

「だけどねえ、担当さん。こんなにややこしい書類なんて、あたし書いたことないわよ」

目の前に座っているのは今年六十歳になるという紅林典江。くれはやしのリエ先々月まで勤めていたスーパーが廃店となり再就職も困難なのだと言う。「スーパーじゃフロアの清掃するだけでよかったから、あまり頭使わなかったし」

「じゃあこの二カ月間は収入なかったんですか。退職金が出たでしょう」

「パート勤務だったから社員さんみたいには出ないわよ。せいぜい寸志程度」

「今までどうやって生活費を工面くめんしてたんですか」

「貯金を取り崩して。でも、もう四ケタになっちゃったから」

「再就職、困難ですか」

困難だから相談にきた——相談者にすれば自明の理なのだが、この質問は半ば義務のようなもので仕方なく訊く。

ただし典江の方は気にしていないようだった。

「六十過ぎたおばあちゃんだし、資格と呼べるものはないし、それにほら」

典江は己の両目を指差した。見れば黒目の部分がうっすらと白く濁っている。医者でなくても、窓口で似たような目の老人たちを見ているから分かる。典型的な白内障はくないしょうの症状だった。

「ずいぶんあるわねえ」

典江が摘み上げた書類は四枚ある。

- 1 生活保護申請書
- 2 資産申告書
- 3 収入・無収入申告書
- 4 一時金申請書と入居費用見積書

いずれも省略できる欄はあるものの、遺漏があれば申請は却下される。細かい字だから、白内障を患わづらった目には判読も容易ではない。

書類を近づけたり遠ざけたりしている典江を見ているうち、切なさ胸を締めつけた。

「どなたか援助してくれるご家族はいらっしゃいませんか。たとえばお子さんとかご兄弟とか」

「子供、どうとうできなかつたのよ。旦那が早くに逝いっちゃつたし、再婚する気も養子取るつもりもなかつたから」

「ご主人は、いつ亡くなられたんですか」

「もう、二十年も前かしらね。仕事中に脳溢血のういつけつであつさり」

つまり、彼女は二十年も独りで生活してきたというのか。

「ご兄弟もいらつしやらないんですか」

「栃木に兄さんはいるけど、今は施設で世話になつてゐる身分だから、無理も言えなくつて……」

「特養、ですか」

「そんないい施設じゃないけど、七十過ぎてゐるしねえ。ずいぶん前から手紙や電話でやり取りすることもなくなつたから」

小日向の中で職業倫理が頭を擡もたげてきた。申請を通すのに必要最低限のことは聞き終えた。後は申請書を作成するだけだ。

「あのですね、今から僕が言う必要書類さえ揃えていただいたら、代わりに書いてあげます。紅林さんは名前と印鑑さえあればいいから」

「いいの？」

「全部の欄を本人が書かなきゃいけない訳じゃないので」

「その必要書類って多いの」

「大丈夫。この庁舎の中で全部揃いますから。揃つたら、もう一度

窓口まできてください」

「ご親切に有難うございます」

「お礼なんて言わなくていいです」

理性で抑えていないと、嘖きこぼれそうな言葉があつたが、すんでのところでも月並みな言葉に置き換えた。

「国の社会保障の予算というのは、こういう目的のために組まれて
いるんですから」

典江は丁寧^に頭を下げてフロアを出ていった。その背中を見送り、
二人目の相手をしようとしていると、後ろから声を掛けられた。

「小日向くん、ちよっと」

声の主は山形課長^{やまがた}だった。

「ちよっと、こっちへきてください」

手招きをされて課長席までいくと、山形は露骨^{ろこつ}に渋い顔を見せた。

「困りますよ、あんなことをされては」

すぐには言われている意味が理解できなかつた。

「さっきの相談者への対応ですよ。何ですか申請書を代筆してやる
って。区役所の職員の仕事じゃないでしょ」

「でも課長。あの相談者は白内障を患っていました。とても申請書
を作成できる状態とは思えません」

「小日向くんの判断することじゃないでしょ」

山形は眉間に鉛筆が挟めそうなほど深い皺しわを刻む。

「見ただけで白内障と判断するなんて、あなたお医者さんなんですか。診断書を持参された訳でもないのに、いち窓口係としては越権行為だと思わないんですか。代筆をこちらから申し出たのはそれ以上問題です。あの人、家族はいないでしょうけど、ご近所に代筆してくれそうな人がいるかもしれないじゃないですか。審査する側が口出しすることじゃありませんよ」

いかにもお役所的な考えに、つい反発心を覚える。

「でも課長。生活保護というのは、あんな風に全く収入源を絶たれた人に支給するための制度じゃないんですか」

「正論によりかかっているから自分は正しい行為をしたというんですか。そういうのはスタンドプレーだと言っているんです」

目立ちたいなどという気持ちは微塵みじんもなかったので、スタンドプレーと言われるのは心外だった。

「後ろで様子を見ていましたが、小日向くんの聴取は不充分です」

これも心外な言葉だった。受給資格の可否判断に必要な事項は洩れなく聴取した自信がある。

「ご兄弟がいらっしゃるとい話じゃないですか。その人が支援ししてくれる可能性を追及しないのは明らかな遺漏事項いろうじこうですよ」

「施設に收容そえんされているとのことでした。それに最近さいきんは疎遠そえんになっ

つるん」

「施設に収容されているからといって経済的に余裕がないとは限りません。疎遠になっているからといって支援が受けられないとも限りません。その詰め方が不十分です」

山形の指摘は一応もつともらしく聞こえるが、理屈のための理屈のようで、やはり反発心が拭^{ぬぐ}えない。それを表情から読み取ったのか、山形は探るような目でこちらを見る。

「どうやら納得がいかないようですね。五分だけでいいから一緒にきてください」

「あの、窓口の方は」

「他の窓口担当に任せておけばいいでしょう」

窓口が少なくなれば、その分申請件数は少なくなる。今日救えたはずの生活困窮者を明日回しにしてしまう——気になったが、山形から解放された後、処理速度を上げるしかなかった。

別室に向かう途中で何を言われるか大方の予想はついた。聴取不充分を注意するだけなら他の職員がいる前でも堂々とするだろう。

山形という男は、部下一人のメンタルに配慮するような上司ではない。

「いったい君は現状を把握しているんですか」

部屋に入っの第一声がこれだった。

「支給額の算定基準となる最低生活費、全国でも東京二十三区が最高額であるのは、君も承知しているでしょう」

小日向は半ば自動的に頷く。最低生活費は生活保護基準の定める金額であり、支給される生活保護費はこの最低生活費から収入を差し引いたものになる。紅林典江の場合、二十三区内居住の六十歳単身なので最低生活費は133,490円、収入0なので支給額も同額になる計算だ。

「最低生活費が自治体で最高額ということは、支給される生活保護費も最高になりかねないということです」

「しかし、都にはそれだけの予算が……」

「予算は無尽蔵ではありません。申請を全て承認したら、前期だけでも予算が危なくなることは承知しているはずですよ。それだけじゃありません。今年度は予算の九割以内で執行するようにとの通達があります」

九割以内が努力目標というのは、小日向も耳にしている。年々増え続ける社会保障費に対し、政府の内部から提案されている対策の一つだ。各自治体ではその意向を受けて、早くも一割減の目標を模索している。もちろん片方で定年の延長もペアで提案しているが、定年延長は企業任せなのに対し、社会保障費の一割減は行政側の裁量なので実効性が高い。

「年度初めに通達の内容は周知徹底したはずですよね」

「はあ……」

「それだけ限られた予算なんです。従って支給されるべき対象者は、本当に困窮して自助努力だけではどうしようもない人に限定されま
す。そのためには窓口の段階で吟味ぎんみに吟味を重ねる必要があります。
つまり、小日向くんの判断はまだまだ甘いと言わざるを得ません」

最前からの繰り返しだと思った。山形の理屈は間違っていない。
予算を管理する側の論理としては正解だろう。しかし大抵の場合、
現状は論理を駆逐くちくする。山形の指示に忠実になればなるほど、生活
困窮者がセーフティネットの隙間からこぼれ落ちていく。本来、困
窮する者を護るはずの制度が、逆に困窮者を弾いている。

おそらく自分は顔を顰しかめているのだろう。山形はふと表情を緩め
てみせたが、決して小日向を労ねぎらうつもりではなかったらしい。

「小日向くんは今年いくつになるんだい」

「二十六です」

二十六かあ、と感慨深げに呟つぶやいてから山形は続ける。

「君の正義感というか、慈悲には共感しますよ。あの窓口に座って
いると、相談にきた人全てを救ってやりたくなる。いや、時として
自分にはその義務と資格が与えられているように思う。わたしにも
憶えがある。しかしね、それは若さゆえの直情というか、一種の錯

覚のようなものなんです。我々公務員は行政機関の末端に過ぎない。決められたことを決められた範囲で粛々とこなす。もちろんその結果が人助けになることも多いが、それはあくまで結果であって担当者の手柄じゃない。そして担当者の正義がいつも正しいとも限らない。規定を外れた申請は背任行為にもなる」

耳に痛い話だった。山形の指摘通り、窓口に座っていると、時折使命感に似たものが頭を擡げることがある。自分では自然な発露だと思っけていても、現場の責任者からは幼稚な正義感に映るかもしれない。なかつた。

「貧しき者病める者を救いたいという気持ちは尊重しますが、規定に背いてまでというのなら自費で救済するのが筋そむというものです。そういう覚悟がなければ規定、あるいは組織の方針に従ってください」

山形は小日向の肩に手を置く。俺の言葉を理解しろという合図だ。

「小日向くんは優秀な人材なんだから。よろしく頼みますよ」

この場合の優秀が何に対してなのか。曖昧あいまいにされている分だけ嘘っぽく聞こえてしまう。

「あと、これは余分なことですが、組織の方針に疑義を抱いているのなら解決案は三つしかありません」

「三つもあるんですか」

「一つ、可能な限り組織の方針を理解して実行すること。二つ、自分が組織の長となって規定を変えること」

残り一つは言わずもがなだった。

山形から解放されても心は少しも晴れなかった。いや、別室に連れていかれる前よりも胃の辺りが重くなっている。

小狡こずるい男だと決めつけてみても、山形の言葉は余計な感情がない分、反論の余地がない。殊に公務員という立場ならどちらが正しいのかは言うまでもない。

自分の良心に従うことさえ許されないのだろうか——そう考えると、続く窓口業務がひどく憂鬱ゆううつになった。だからといって途中で退所できないのが官仕えの辛いところだ。

昨今、生活保護の不正受給が問題になっているが、その多くは申請後に発覚する。言い換えれば窓口は申請書類を受理するだけの業務なので、それだけ責任は軽いと言える。

ところが小日向は簡単に割り切れる性格ではなかった。自分でも時々嫌になるが己の言動をいちいち思い返し、後悔や自己嫌悪を繰り返してしまう。相談者が哀しい顔をしたと思いついては自分を責め、生活保護打ち切りで自殺した者がいると聞けば自分の担当ではなかったかと怯える。

そういう人間なので、続く窓口業務では知らず知らず顔つきが陰しくなった。もつともそれを知ったのは、隣の窓口に座っていた瀬尾が終業後に教えてくれたからだ。

「課長から何言われたか知らないけどさ。ホント、お前って考えることが全部顔に出るのな」

今日は金曜日。誘いに応じて連れていかれた居酒屋で、瀬尾は半ば同情、半ば揶揄するように話し掛ける。たった一年とは言え、先輩として発揮できる権力の一つだった。

「まつ、横に座っていたからどんな説教食らったか想像はつくわな。どうせ理想と現実の差ってヤツだろ」

「……個人の正義を持ち込むなと言われました」

「個人の正義。はん、あの課長が言いそうなことだ」

瀬尾は目の前に注がれたコップのビールをひと息に啜る。

「そう言や、俺も最初に言われたなあ。相談者に同情するのは勝手だが、国の予算配分を決めるのに勝手は許されないとか。確かに都民の血税の一部を振り分ける仕事だから、そこに個人の恣意が紛れたらまずいってのは分かるんだよな。ほれ、小日向もう一杯」

「ごうむ」

「それで俺は割り切っちゃったんだけど、お前はそーゆーの、まだ無理みたい」

「どうしてですか」

「基本的に善人だから。見て分かるんだよ。お前、相談者に肩入れして、何とか救ってやろう、何とか役に立ってやろうって思ってるだろ。普段から芝居っ気とか照れとかないから、気持ちがそのまんま行動に出るんだよな」

それでは、まるで子供ではないか。聞いている途中で恥ずかしくなってきた。

「誰だって自分なりの正義感はあると思うけどさ、それを仕事で発揮できるのはお巡りさんか自衛隊員だけじゃないのかねえ。俺ら公務員を含めて、サラリーマンてのは何かの奴隷なんだから」

「聞いていて空しくなってきました」

「その空しさを吐き出すために呑み屋があつて酒があるんでしようが」

言いながら瀬尾は二杯目を呷る。羨ましいのはこの男が酒好きのところだ。ただ呑むだけでも嫌なことは忘れるだろうに、酒の味を愉しむ余裕があるので二重に効用がある。

それに引き替え小日向はどちらかと言えば下戸の部類であり、ビールなど何を呑んでも同じ味しかない。

「社会人四年目の男に言う台詞じゃないけどさ、俺たちや肉体か精神か、はたまたその両方を提供して給料もらっている訳よ。それが

時々辛くなるから、俺は酒を呑むし、もっと気の利いたヤツなら彼女とよろしくやる訳じゃん」

彼女と聞いて苦笑しそうになる。学生時分にそれらしき相手はいたし、今だって興味がないことはないが、興味というなら廃駅が一番だ。

「彼女じゃなくても、打ち込める趣味があるだけでもずいぶん違うんだけど。そう言や、小日向の趣味って何だっけ。今まで聞いたことないな」

小日向の方は一杯だけで既にアルコールが回り始めていた。このまま酔いに任せて廃線趣味を告白してしまおうかとも思ったが、過去の記憶がそれを思い留まらせた。

この人なら大丈夫だと安心して廃線愛を打ち明けると、大抵引かれた。根暗、キモい、意味不明。およそ配慮の欠片かけらもない言葉で一蹴された。言った本人にそれほどの悪意はなかっただろうが、言われた方に見れば二度と口にするまいと警戒心だけが強くなる。

「……趣味は、特にないす」

「そっかー。老婆心ながら言っとくけど、どっかでガス抜きしとかないと病むぞ、そのうち」

それなら安心してくれ、と小日向は心中で答える。

言われるまでもなく、このもやもやを放っておけば病気の原因に

なりかねない。加えて鬱憤晴らしの方法にもアイデアがある。

先日の〈幻のホーム見学ツアー〉はなかなか興味溢れるものだったが、今抱えている鬱憤はあの程度では到底解消されないだろう。

そう、予てから密かに思い描いていた計画を実行する以外には。

小日向は決意に勢いをつけるため、苦い二杯目に口をつけた。

2

鉄道オタクに限らずこの世のマニアに共通する願望は、他では手に入らないモノを手に入れることと、他のマニアにはできない体験をすることだ。

実を言えば、東京二十三区内の地下には多くの廃駅が眠っている。先日訪れた旧新橋駅もその一つだが、わざわざ見学ツアーと銘打たれるのは、普段は滅多に訪れる機会がないからだ。

言い換えれば、一般人が気軽にいける場所ではない。防犯上の問題もさることながら、地下鉄の多くは線路付近に敷かれた電線から電気を供給しているので、誤って触れた場合には感電死してしまうこともあるのだ。

小日向自身、過去には何度も東京メトロ広報部やお客様センターに問い合わせをしていたが、いずれにもべもなく断られた経緯があ

る。断られる度に悔しい思いをしてきたが、いつしかその悔しさは発酵し別の思いに転化するようになった。

どうせ許可されないのなら、いつそ無断で訪れてしまえ——乱暴な理屈だったが、マニア気質が倫理を駆逐した。元よりマニアというのは（狂的な）という意味だ。道を究めよう、好きを貫こうとすれば、どうしても世間の常識や良識、時には法律さえ敵に回すことになる。伝え聞く話では、その昔、オーディオマニアの一人はオーディオ機器の振動を防ぎたい一心で、禁輸対象の防振装置を密輸していたという。これは極端な例だが、それでなくても会心のワンシヨットを撮りたいがために、進入禁止の線路に足を踏み入れる撮り鉄は引きも切らない。

瀬尾と別れて自宅アパートに戻った小日向は、着替えを済ませるなり廃駅訪問の準備に取り掛かった。動きやすい服装に大型のリュック、履き慣れたスニーカーと各種照明類、作業服と予備のバッテリー。装備を確認する毎に気分が昂揚してくる。

小日向が少し危険で違法な行為を決意したのは昼間の一件がきっかけだが、いつでも計画を実行できるよう以前から装備は整えていた。今となればきつかけは何でもよかったのかもしれない。ただ、自分を違法行為にまで駆り立てるような理由づけが必要だった。

必要な機材をリュックに詰め込むと、小日向はアパートを出た。

時刻は午後十一時四十分、まだまだ宵の口だ。目的地に着く頃には深夜零時を優に越えているに違いない。

最寄りのJR駅で電車で飛び乗り、秋葉原をあきはばら目指す。ジーンズにセーターならリュックを背負っていても違和感がない。周りの乗客も、自分には特に気に留めていないようだ。

秋葉原に到着する頃には、予定通り深夜一時に迫っていた。終電の時刻も過ぎ、中央通りにはまだクルマの行き来があるものの、人通りはまばらになっている。

しばらく進むと、歩道のほぼ中央に地下鉄の通風孔が現れた。この時刻になると通過するのは車庫入りする電車だけになるので、滅多に風も吹いてこない。

小日向はスマートフォンを取り出し、人待ち顔で周囲の様子を探る。何しろ交差点を曲がった先には万世橋警察署があるのだ。巡回中の警官に見咎みとがめられた時の口実が要る。

視線は液晶画面に落としても、神経は周囲に張り巡らせる。やがて唐突に気づいた。

ちよつと羽目を外す程度の行動と考えていたが、警官の目を盗んでする行為は立派な犯罪ではないのか。ただでさえ地下鉄構内への無断進入は違法行為なのに、今自分がしようとしているのはメトロの職員さえ碌ろくに使わない場所への侵入だ。万が一見つければ、間違

いなく罪に問われる。

こうした場所への不法侵入はどんな罰則だったのか。

逮捕か、嚴重注意か。逮捕の場合、罰金は最高でいくらまでだったか。まさか禁固や懲役ちようえきなどということはないだろうが。

目的地に辿り着くことでいっばいだった頭が、ようやく冷静さを取り戻しつつあった。たかが不法侵入程度で大層な刑罰を食らうこととはないにしても、勤め先に知られるのはまた別の問題だ。軽微な罪でも公務員を続けていくには致命的な傷になる場合もある。訓告か減俸か、それとも停職か。

間抜けな話だが、今頃になって背筋がぞわぞわとした。勢いに任せてここまでできたが、冷静に考えてみれば、今しようとしていることは安穩あんのんな公務員生活に自ら終止符を打ちかねない行為だった。

すぐに引き返そうとも思ったが、不思議に全身は未だに周囲への警戒を続けている。

我ながら呆あきれた。どうやら廃駅マニアの血が敵前逃亡を許してくれないらしい。

一時二十分を過ぎて、いよいよ人通りは途絶えた。

チャンスは今しかない。

小日向はビルの陰に身を潜め、リュックから引き出した作業着に着替える。元の位置に戻り、今度は三本のカラーコーンを取り出す。

作業着姿のまま通風孔を塞ぐふさグレーチングの周囲にカラーコーン
を置く。こうしておけばグレーチングが開いているのを見られても、
何かの工事中と思わせることができる。通行人が誤って滑落する事
故も防げる。

次に取り出したのはグレーチングを外すためのフックだ。全くネ
ットの世界は重宝だ。カラーコーンにしてもグレーチングフックに
しても簡単に入手できる。ダークウェブに至っては拳銃や違法薬物
も手に入るといふのだから、日本国内の犯罪が悪質化するもの当然
だと思った。何せ真面目な公務員であるはずの自分が、こんな真夜
中に廃駅への不法侵入を実行しているのだ。

グレーチングの重量は想像以上だった。渾身の力を込めても易々
と動いてくれない。額ひたいに玉のような汗を浮かべて数分間、やっと持
ち上げることに成功した。

目の前にぽつかりと口を開けた暗渠あんきょ。懐中電灯で照らしてみると、
真下には地下へと続く階段が見えた。

湿っぽい埃ほこりの臭いが立ち上ってくる。

これが銀座線萬世橋駅への入口だ。

踊り場から地上までの高さは三メートルほどもあるのか。実際の
出入りには脚立きゃたつでも使うのだろうか、さすがにそんな代物はリュック
に入らない。代わりに用意したのは縄梯子なわはしごだ。小日向は先端をガ

ードレールに固定し、梯子を暗渠の奥に垂らす。

いよいよだ。

小日向はライトヘルメットを被って梯子に手を掛ける。慎重に足を乗せて降下していく。

埃っぽい臭いはますます濃厚になっていく。気のせいか周りの温度も少し下がったようだ。

踊り場に着地し、中を照らす。ライトはLEDだから当分電池切れを起こす心配はない。

階段壁面には上部に太いパイプ、足元に細いパイプがそれぞれ走っている。太い方は排水管だろう。

階段の幅は予想以上に狭い。片手で壁を確認しながら、これも慎重に階段を下りていく。事前に調べた段数は四十段ほどのはずだが、ゆっくり下りているのでそれよりも多く感じる。

何かの工事やイベントの際には壁面の蛍光灯が点灯するのだろうか。今はそれもなく、ヘルメットのライトが唯一の光源だ。古めかしい言い方だが、まるで地獄の底に降りていくような感覚に陥る。しかし自分はずくづくマニアなのだと思う。恐怖を覚えるどころか、まだ見ぬ世界への期待で胸は高鳴っているのだ。

やがて小日向は八畳ほどの広さの踊り場に降り立った。改めて周囲を照らしてみると壁は全てコンクリートが剥き出しになっており、

内装らしきものは何一つ施ほどこされていない。

しんしんと迫ってくる寒気とともに、言い知れぬ昂奮を覚える。
ここが萬世橋駅跡に残されたプラットホームだった。

ホームの長さは、やはり旧新橋駅と同様に七十メートルほどしかない。こぢんまりとした印象は、そのまま地下鉄開通当時の面影を残している。

地下鉄萬世橋駅も旧新橋駅と同様に、開業から廃止まで二年足らずの寿命しかなかった。昭和二年、浅草く上野間に日本初の地下鉄道を開通させた東京地下鉄道は、新橋に向かって延伸工事続けた。だがその途中には神田川かんだがわが控え、川底の開削かいさくを続けるには水路の一時変更を含め長期工事が予想された。そこで完工するまでの暫定さんてい的な停留所として昭和五年一月一日に開業したのが萬世橋駅だった。

暫定的であつたせいかわプラットホームは木造による仮架設だったという。当時は運行本数の半分がこの仮設駅を終着始発として運転され、地上にあつた国鉄萬世橋駅への乗り換えや東京市電への連絡も簡便だったために利用者にも好評だった。

だが所詮は仮設駅であり、地形が急勾配ききゅうばいである事情も手伝つてととう常設駅に昇格することはなかった。新橋への開削工事が進む中、昭和六年十一月二十一日の神田駅延伸開業に伴って萬世橋駅は同日で廃止となる。

小日向は狭いホームの中央に立って、はるか昭和の遺物に思いを馳せる。最初から間に合わせの停留所として誕生し、その役目を忠実に果たして予定通りに寿命を全うした駅。昨今のように膨脹し続け、ハブとしての役割も拡大していく近代的な駅とは、その佇まいを異にする。有りようが何やら自分と同じ木端役人のようこっばで、同類を見るような愛着を覚える。

おっと忘れるところだった。

作業着のポケットからスマートフォンを取り出し、フラッシュを焚きながらホームからの景色を撮影し始める。旧新橋駅とは違い、ここは車両の留置場にさえ使用されていないので殊更ことごとに無常観を掻き立てる。

廃墟は死体と一緒だ。旧新橋駅の訪問時に覚えた感慨がひときわ強くなる。しん、とした静寂はそのまま死者の静けさに通じるものがある。

小日向は注意深く線路に降りてみた。電線の位置を確認し、接触しないようにゆっくりと移動する。

今回の目的は萬世橋駅から神田駅まで可能な限り線路を辿ることだった。先述の通り、新橋への延伸工事のため神田川はいったん水路を変更、完工の後にまだ元通りになっている。つまり萬世橋駅から神田駅に向かう途中で川底に設けられたトンネルを通ることにな

るのだ。

トンネルの真上は神田川。何という胸騒ぎのするシチュエーションなのだろう。

いちいち足を確かめながら進むので、やはり歩みはのろくなる。廃墟となった構内を見て歩く分には少しも苦ではないが、この調子では探検が終了するのは明け方になりそうだ。既に日付は変わって土曜日。アパートに帰ったら、ひたすら惰眠だみんを貪むさぼることになりそうだった。

かし、かし

かし、かし

感電に備えたゴム底が線路上の砂利を踏む。通風孔が開いたままでも地上とはかなり離れているので、クルマの走行音も届かない。聞こえるのは自分の足音だけだ。そして光源もヘルメットのライトのみ。

戯れに、奥の方に向けて声を放ってみる。

「誰かいますかあー」

声は構内に反響し、やがて幽はかなく消えていく。するとまた静寂が降りてきた。

無音で光の射さない地下空間。こうしてとぼとぼ歩いていると、まるで世界中に自分一人しか存在しないような気になってくる。昼

間にあった山形とのいざこざも、この瞬間完全に吹き飛んでいた。

我こそは地下帝国の王。

我こそは闇の支配者。

この世にただ一人存在し、全てを統べる全能の神。

小日向の胸の中は、かつてない充足感に満たされる。自己顕示欲も承認欲求も必要ない。ここでは自分が神そのものだから。

神だから慈悲もある。己を崇拜する信者たちを救うのも罰するのも自在だ。

たとえば紅林典江を困窮から救い上げること。

またたとえば山形のような役人を罰することも。

気分は止め処もなく壮大になる。突入前に抱いていた警戒心や罪悪感はどうに消し飛んでいた。また試したことはないが、麻薬を打てばこんな全能感を味わえるのではないか。

まずい、とそろそろ心が怯え始める。

これは予想以上に耽美で妖艶な世界だ。地上とは全くの異世界と言ってもいい。現世の悩みや倦怠を払拭してくれる清浄の地だ。

瀬尾の憂さ晴らしが酒なら、自分のストレス解消法はこれしかないように思える。いや、思うどころではなくもはや確信に近い。

癖になったらどうするつもりだ。毎週毎週、いや、事によれば毎日この地を訪れるようになれば、趣味の領域を越えて生き甲斐にな

ってしまうぞ。

そのどこが悪い、ともう一人の小日向が呟く。

元来、趣味というものは家庭や仕事とは別の、もう一つの生き甲斐ではないのか。

闇の四方から誘惑の手が伸びてくる。小日向は心の片隅で迷いを覚えながら、そろそろと手を差し出しかける。

その時だった。

線路の向こう側に点のような光源が出現した。

小日向は慌ててヘルメットのライトを消灯する。

東京メトロの関係者だろうか。

鉄柱の陰に身を潜め、彼方かなたに揺れる光源を注視する。光源は揺れながら次第に大きくなり、こちらにじわじわ接近しているのが分かる。

相手の姿が見えない分、妄想が膨らむ。

東京メトロの職員以外の可能性はないか。

たとえば廃駅に紛れ込んだ浮浪者。

たとえばここを根城にしている不良たち。

たとえば警邏中の制服警官。

たとえば逃走中の重大犯人。

恐慌に陥る一歩手前の思考の中で、小日向は武器になるようなも

のを持参していないか必死に記憶を巡らせる。

そんなものは何一つなかった。

途端に心臓が早鐘はやがねを打ち始める。足場の悪い線路では全力で走れない。それに加えてどこに電線が露出しているかもしれない、しかも初めて足を踏み入れた場所だ。自分にとって有利な条件は欠片もない。

さあ、どうする。

物音を立てたが最後、相手は小日向の位置を捉え、襲い掛かってくるだろう。しかし身を潜めたままでは、迫りくる危険に対処できない。

どうする。

どうする。

どうする。

心臓の早鐘が自分でも聞こえる。鎮まれ。鎮まれ。相手の耳に届いたらどうするつもりだ。

口の中がからからに渴く。膝から下が小刻みに震え出した。

「誰か、そこにいるの」

光源の方向から聞こえてきたのは、何と女の声だった。

「あなたでしょ。さっき誰かいませんかって声、上げてたの」

声の調子は若々しく、しかし怯えた響きが多分に混じっている。

怖いのは向こうも同様らしい。

相手に危険が感じられないのなら、逃げ回るのは却^{かえ}って危険だ。

小日向は覚悟を決めて鉄柱の陰から出る。再びライトを点灯させ、光の輪を相手側に向けた。

浮かび上がったのはティーンエイジャーと思^{おぼ}しき女の子だった。

向こうのライトが小日向の顔を眩しく照らし出す。

「あなた、何者？ メトロの職員さんじゃなさそうね」

女の子は警戒心を残したまま、問い掛けてきた。

〈つづく〉